

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



## 今号の視点

# 大学での学びへの意欲とスキルを 育成する初年次教育〈西日本編〉

専門教育を学ぶための基礎となる「初年次教育」を積極的に行い、学生が大学での学びに向かう意欲を高め、スキル養成や専門教育への土台づくりを行う大学について、10月号に引き続き西日本にある2校を紹介する。

教育目標である「4つの力」の  
定着を初年次に徹底

三重大  
「4つの力」スタートアップセミナー

### ◎課題意識と狙い

三重大では「4つの力」スタートアップセミナー（以下、スタートアップセミナー）が1年次の必修科目である（人文学部は選択制）。同大が教育目標として設定した「感じる力」「考える力」「コミュニケーション力」「生きる力」の4つの力を軸に、学生が主体的に学ぶための素地を身に付けることを目的と

した科目だ。

「教育目標が掛け声だけに終わらないように、学生にしっかりと浸透させるために必修科目にしました」と、授業を担当する高等教育創造開発センターの中島誠講師は説明する。以前からPBL（\*1）に力を入れていたこともあり、「1年次の早いうちに基本的な学びの姿勢を養成したい」という全学的な意向も導入の背景にある。

### ◎取り組み内容

スタートアップセミナーは、同大の共通教育（いわゆる一般教養）の核となる科目だ。全15週の

授業があり（図1）、担当は中島講師、同センターの長濱文与准教授、中山留美子講師の3人。学部所属教員のサポートもあるが、主にこの3人の教員が、30クラス（1クラスは4人×10グループ）、計約1200人の新入生のほぼ全員を指導する。

半期の授業でのグループ・プロジェクトを通して「4つの力」のスキルを学び、最終的にはグループごとに設定したテーマに取り組み、発表する。発表テーマは、「節約生活の方法」「ストレスマネジメント」「どんな医師になりたいか（医

学部）」などさまざま。発表に対して、教員や同じクラスの学生から論理の一貫性などを厳しく評価され、フィードバックを受ける。

「この学びを通して学生は、主体的に学ぶことやクリティカルシンキングなどのスキルの重要性を知り、その後の専門教育に生かすことはもちろん、社会に出ても役立つ、新入社員研修のような側面もあります」（教育学部・南学教授）スタートアップセミナーの授業は週1回行われる（2単位）。毎回の授業の前半は講義、後半はプロジェクトを進行させるためのグ

\*1 Project-based Learning の略

図1 三重大「『4つの力』スタートアップセミナー」の授業内容

回	テーマ
1	導入、大学での学び（モチベーション）
2	グループ活動の基本（社会人としての態度）
3	アイデアの発想（感性）
4	テーマの設定（課題探求力）
5	情報の種類と特徴（情報受発信力）
6	計画の立て方（問題解決力）
7	情報収集における手順とマナー（倫理観）
8	プロジェクトのピアレビュー（感性、共感）
9	情報の吟味（批判的思考力）
10	レポートの作成（論理的思考力）
11	発表の方法（情報受発信力）
12・13	プロジェクト発表と評価（統合力）
14	プロジェクトの振り返り（統合力）
15	全体の振り返り（統合力）

毎回、授業の冒頭30分で前時の振り返り、本時のテーマについての講義が30分、その後グループ討議を行う。毎回、振り返りを行いながら、グループでの議論の深まりに合わせてスキルについてレクチャーをする。  
\*大学資料を基に編集部で作成

グループディスカッションに充てられる。授業の講義やグループ活動では、スタートアップセミナー専用のテキストを使用し、テーマを深めたり、議論を活性化したりするために必要なスキルを学びつつ進められる。このテキストは、教育目標である

4つの力の要素を全クラス同じレベルで伝えるために使用されている。テキストには次回予告や振り返りシートも用意されており、予習・復習、授業外でのグループワークなど、自主的な学習にも取り組むことが前提となっている。このように、学生が自主的に取り組まざるを得ない仕掛けがふんだんに盛り込まれているのがスタートアップセミナーである。

三重大では他に各学部の基礎ゼミもある。スタートアップセミナーは「大学として共通で養成したいもの」、基礎ゼミは「学部固有に必要なスキル養成」と、それぞれの役割を明確にしている。また、共通教育には共通セミナー、PBLセミナーと呼ばれる学部横断型のゼミ形式科目（選択制）もあり、大学で学ぶ土台づくりのためのさまざまな機会が設けられている。

◎成果と課題

専門教育や他の科目担当の教員からは、「グループ学習に慣れているので、PBL型の授業をしやすくなった」「学部で一から

教えなくても共同作業が出来るようになった」と評価を得ている。生物資源学部1年の山形隼大<sup>はら</sup>さんは、グループをまとめるのは大変だったと振り返る。

「就職をどう有利にするか」をテーマに決め、昼休みや授業の空き時間などに、図書館での資料収集や、就職支援センターの職員に取材をした他、親の話を聞いたり、ネットで調べたりと、授業外学習に積極的に取り組みました。そこで得られた情報はグループで持ち寄って話し合いました。グループをまとめる力、皆の意見を要約する力、資料の作り方や発表の仕方、社会人としてのマナーなど、いろいろな面で学ぶことが多くありました。更に、自分から動かないと相手も動かないことも身を以て知りました」

今では学生がこの科目を「4つの力」と略して呼ぶほど学内で定着している。課題は、学部の2年次以降の教育との接続だ。学部・学科によってスタートアップセミナーへの関与に差があるため、必ずしも全学部・学科で円滑に接続できているわけではない。また、今の形が完成型

というわけではなく、初年次教育（共通教育）のあり方自体の見直しを含め、改善を続けていくという。

少人数ゼミでスキルと共に人間関係や視野を広げる

近畿大  
基礎ゼミ・専門基礎演習

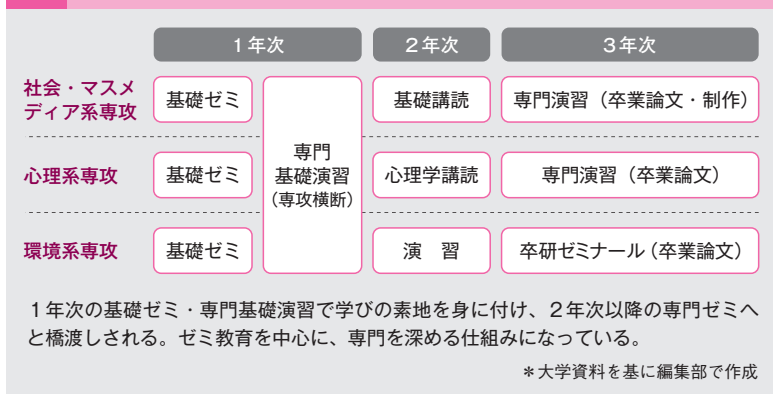
◎課題意識と狙い

近畿大では、全学部で1年次の基礎ゼミが必修であり、これに加え、「マイキャンパスプラン」という、半期ごとに面談を行いながら学生の目標・達成カルテの作成に取り組みなど、少人数教育や学生個別の対応に力を入れる。特に、2010年度新設の総合社会学部では、より「教育」に重点をおいた体制が取られた。

総合社会学科1学科（入学定員450人）に、社会・マスメディア系、心理系、環境系の3専攻を設置し、47人の専任教員で構成される同学部は、小さな総合大学ともいえる。同学部の1年次前期には所属専攻の「基礎ゼミ」があり、後期には専攻横断の「専門基礎演習」がある。通年で、ゼミが必修となるシステムだ（P.44図2）。

\*2 Teaching Assistant の略

図2 近畿大総合社会学部の4年間のゼミ教育



総合社会学部事務部の木地平浩次<sup>キヘイヒロ</sup>事務長は、「高校と違い、大学はクラス単位で授業を受けるわけではありませぬ。学生が孤立しないよう、居場所のある学部にしたいと考えました。また、さまざまな分野の教員が集まる学部の特性を生かし、多くの教員と接点を持つことで多様な考え方があつたことが、このようなゼミ中心

のカリキュラムにした背景です」とその意図を語る。

### ◎取り組み内容

前期の基礎ゼミでは、新入生は専攻ごとに1クラス12〜15人で組まれ、学部共通のテキストを使いながら、大学での学び、レポート作成法、プレゼンテーションの方法などを学ぶ。他大学の初年次ゼミでは1人の教員が15コマを担当するものが多いが、同学部では、学生の所属専攻の3人の教員が自分の専門の話題を織り交ぜながら5コマずつ担当し、これらのスキルを指導する。

授業は教員各自の研究室で行われる。学生は複数の教員と交流し、研究室で学ぶことで、同じ専攻の教員であっても視点や考え方だけでなく、研究室の蔵書の種類まで違うことを知る。

総合社会学部環境系専攻の久隆浩<sup>ヒロタカヒロ</sup>教授が担当する基礎ゼミの5コマの授業では、「自己紹介」「新聞の社説を読んで見出しを付ける」「プレゼンテーション」「合意形成のトレーニング」としてのディスカッションなど、密度の濃いゼミ活動を行う。特にディスカッションでは、意見の

多様さ、答えが1つではないことを強調する。

後期の専門基礎演習では、クラスの替えがあり、3つの専攻の学生混合の12〜15人1クラスの編成となる。教員も3つの専攻の教員が入れ替わり、2週ずつ計7人でそれぞれの専門分野を基にゼミを進める。

この結果、1年次を終えた時点で、学生は10人の教員と接点を持つだけでなく、専攻を超えた学内の学びの友人を多数得られる。

「この仕組みは学生に好評です。多くの先生に出会える、さまざまな考え方が分かる、他専攻に仲間が出来ること、その理由です。この仕組みは『先生と仲良くならうよ!』が最大の目的です。大学を好きになる、先生を好きになることが学習の動機付けにつながり、自分の専門や将来のキャリアを考えるきっかけとなるのです。教員も1年間で120人の学生と接する中で、顔と名前が一致する学生が増え、個別対応が可能になるのです」(久教授)

### ◎成果と課題

学生は教員と交流を深めることで教員の専門分野や授業に興味を湧く

という好循環も見られ、その結果、2年次以降の科目選択もスムーズに出来ているようだ。大学が行う学生意識調査では、1年次での体験が、2年次以降の学びへの期待につながっているという結果も出た。

社会・マスメディア系専攻3年生の山本雪乃<sup>ユキノ</sup>さんは、「議論や自分の意見の発表などを通して、自分で学びかけがつかめた」と振り返る。

「後期は先生が2週で交代するので、7人の先生の専門分野に触れ、2年次以降のゼミを選ぶきっかけをつかめました。先生と研究室でお昼を食べることもありますし、1年次のゼミで知り合った学生とは今も仲良しと、交友関係も広がりました」久教授は、今後の課題として学生の二極化を挙げる。

「我々の狙い通りの力を発揮できている学生と、なんとなく学生生活を送ってしまう学生がいます」

課題に熱心に取り組んでいる学生ほど厳しさを感じているが、そうでない学生は楽だと感じているという。そうした学生には、評価方法の改善や「マイキャンパスプラン」の面談を利用した個別フィードバック



意見の言い方や  
話を聴く姿勢が変わった



三重大教育学部  
家政科教育コース1年  
田中 里菜  
(私立鈴鹿中学校・高校卒業)

「4つの力」スタートアップセミナー」はグループ活動中心の授業で、グループ内の役割分担や互いの進行状況を把握するのが大変でした。私は中学・高校時代は何でも自分1人で突っ走ってしまうタイプで、グループ活動には前向きではありませんでした。しかし、授業を通して、自分の役割を果たすことや責任感を持つことの大切さ、成果を出す難しさを痛感できました。

また、主観と客観の両方の視点を持つように先生からよく指摘され、他人に対しての自分の意見の言い方も学びました。毎回、授業後に「振り返りシート」で反省したことで、意識できたのだと思います。最後のプレゼンテーションでも言いいたことが伝わらず反省ばかりでしたが、発表の構成自体は評価されたのはうれしかったです。

授業を聴く姿勢も変わりました。初めは興味が持てなかった授業も、板書を単に写すのではなく、「先生の伝えたいことは何だろう」と意識して聴くとだんだん興味が持てるようになり、知らないことは調べるようになりました。

初対面の人でも話し  
発表も苦にならなくなった



近畿大総合社会学部  
環境系専攻3年  
野間 彩希  
(大阪市立東高校卒業)

前期の基礎ゼミでは、先生や他の学生と、「意見を言う↓グループで調べて発表する↓議論する」を何度も繰り返しました。学生同士はもちろん、先生とも「距離が近い」と感じるが多かったです。後期のゼミで、他の専攻の先生や学生との関係もうまくつくれるようになっていました。

どの先生の授業でも発表の機会が多く、資料作成や発表にも慣れました。3年生になった今は久先生のゼミで、地域の小学校や地元イベントの企画、広島県三次市の限界集落の調査などに携わっています。ここでも1年次のゼミでの経験が生きていると思います。特に、知らない人へのインタビューや、人前での発表が苦にならなくなっています。

また、聴いた話をその場で自分なりにまとめ、更に深い質問をするというようなことも出来るようになりました。大学入学前までは、知らない人や大人与話することが苦手で、授業でも当たるのが嫌だったのですが、今は抵抗ありません。

などの対応を検討しているという。また、10年度に入学した1期生が卒業する時点でチェックを行い、改善点を見つけていく予定だ。

進路指導に生かす

教育内容にプラスして  
運営体制にも注目

三重大では「4つの力」という大学の教育目標に準じたスキルを養成し、近畿大総合社会学部ではスキル養成と共に学生の意欲向上や視野の拡大を狙いとしていた。いずれも、初年次に大学で学ぶためのレディネスをしっかりとつくる好例と言える。

また、三重大では3人の教員がテキスト制作も含め、運営・改善をチームで行い、近畿大総合社会学部では複数の教員が1つのクラスを担当するため、情報交換を密に行っていた。こうした組織的な取り組みは、授業内容の水準を維持・改善していくための1つの解といえる。

学びの内容だけでなく、取り組みの運営が組織的、安定的になされているかどうか注目することも、大学選びの1つの指標となるだろう。

取材・編集協力：山内太地

初年次教育に少人数のゼミ形式を取り入れる大学・学部を紹介

特徴的な初年次教育実施大学 西日本編

京都大  
ポケット・ゼミ

1年次対象に開講するゼミ形式の科目。歴史・地理・古典の講読や、環境・資源・宇宙・医学等の最先端の学問、野外実習など、総合大ならではの豊富な内容だ。ただし、新入生の6割ほどしか受講できない。

大阪市立大経済学部  
基礎演習など

1年次前期の「基礎演習」で、文献講読や少人数での討論、プレゼンテーションなどを学び、その後、「イノベティブ・ワークショップ(課題探求演習)」で課題解決法を学ぶ。2年次後期の「論文演習」では、修了論文を執筆する。

同志社大商学部  
入学前教育と導入教育科目

入学予定者を対象に入学前教育を実施。入学後の導入教育科目「アカデミック・リテラシー」につなげ、経済活動の現場で社会体験をする科目「ビジネス・トピックス」も用意する。いずれも選択科目。

武庫川女子大  
担任制

開学時から担任制を導入。担任は1年生のゼミ「初期演習」も担当する。5月の体育祭は全員参加。学科単位で競う応援合戦は上級生が指導する。2泊3日の宿泊研修も全員参加。